

「道徳」から「人間学」へ



元岩手県教育委員会 委員長
安藤 厚

「人間学を学ぶ」を掲げる月刊誌に『致知』というのがあります。「致知」とは中国の古典『大学』に出てくる言葉で、知行合一の精神のことです。

薪を背負って歩いている二宮金次郎が読んでいたのが『大学』です。昔は「論語」の前に読むものでした。『致知』の愛読者が十万人になったら、日本は変わると言った人がおりました。創刊三十五周年の昨年、十万人を超えました。私は30年前にこの月刊誌を偶然手にして以来、今も読み続けています。先人の偉業や現役で各界において活躍している人の生き方などが、本人の言葉で、対談で、インタビュで語られており、それは私の心の財産になっています。

昨年の六月号には、下村博文文部科学大臣のインタビュー記事が載り、反響がありました。その一部を紹介します。

群馬の山村で生まれ育ち、九歳で農協の職員だった父を交通事故で亡くし、下には五歳と一歳の弟がおり、子育てに追われていた母は一転、夜明け前から小さな田畑を耕し、昼はパートで働き、そのあと暗くなるまで再び農作業という生活になりました。

生卵一個を兄弟で分けて食べたこともあるほどで、小学五年の時、家庭科で裁縫を習うのに、その道具すら買えませんでした。先生がそっと裁縫の道具を渡してください、「博文ちゃんは今後、文部大臣になるかもしれないね」とおっしゃった。

文部大臣になりたいと意識したのは二十代のころでしたが、原点はこの時の先生の励ましの一言でした。貧しい母子家庭で、いろいろいじめられましたが、意識の目覚めが割合早い子どもだったようで、小学生のこ

ろから「自分は何のために生まれてきたのか」「どう生きるべきか」と思い悩んでおり、図書館で偉人伝を読み、歴史に名を残す人物は子どもの中から順風満帆で物事を成したのではなく、挫折、苦勞、貧困を味わいながら人間として大成していったことを知りました。学校にあった偉人伝は全部読みつくしました。

中学を卒業する頃、母から昼働き、夜は定時制高校に通って家計を助けてほしいと言われていたが、その頃できた交通遺児育成会（現在の「あしなが育英会」）の奨学金で普通高校に進学できました。そして将来は早稲田大学に進んで政治家になるという志を抱き、勉強の傍ら一所懸命アルバイトをしました。

大学一年の時、家庭教師のアルバイトで出会った小学六年生の少年が自分の進路に大きな影響を与えることになりました。

彼はテストの度に思わしくない成績が出てくるので自信を無くし、心身症の寸前だったのです。テクニクを教えるより自信をつける方が先だと考えました。

ヒントだけを教えて徹底的に自分で考えさせ、解いたら

褒めるといふやり方を繰り返す中で、成績が上がり始め、最後はトップグループになりました。教育というのは面白いんだなと思いましたね。

その時、彼は父親の仕事が行き詰まり、親戚に預けられたと聞いて訪ねると倉庫だったところに一人住んでいました。でも「物は考えようだ。今回のことで君は大きく成長する。間違いない。だから頑張れよ」と激励しました。

彼は驚くほど逞しくなっていました。そうした経験があつて、小学四年生の時、アパートの窓に「博文学院」と張り紙して学習塾を始め、ドロップアウトした子や警察の非行リストに載っているような子ばかりでしたが、授業以外にも日曜日に一緒に野球をしたり、無料で勉強を教えたりする中で一人ひとりどんどん自信を付けました。

結果的にそれが反響を呼んで十五年後には生徒は約二十人にまで増えただけです。

塾経営を通して、ドロップアウトした子どもに対して無力で、しかも人間として頑張る能力を自ら引き出すといった人間教育の場がない公教育に強い疑問を持ち始めました。

それなら教育を自分の手で変えてやろうと平成元年に東京都議会議員になり、八年には国政に挑戦し、衆議院議員になったんです。

私の考える道徳の教科化とは、子どもの発達段階に応じた、人はどう生きるか、を教える事です。ですから道徳というより広い意味で人間学といった方がピッタリくるかもしれません。

長い引用になりましたが、『致知』三十年の読書から、私は今、「人間学」というものに大きな期待を抱いております。

プロフィール

安藤 厚 (あんどう あつし)

- 昭和9年・仙台出身
- 小学校（国民学校）5年から北上で育つ（この年の8月、敗戦）
- 東北大学文学部西洋史学科卒
- 高校教師（世界史）として浄法寺、盛岡市立、花巻北、盛岡一、福岡に勤務。
- 県教委県立学校課長、盛岡二高、盛岡一高校長を務める。
- 富士大学教授、県立産業短大校長 県教育委員長、県ユネスコ協会連盟会長 県国際交流協会理事長
- 平成20年 県勢功勞者表彰 瑞宝小授章受章